

野ぶどうを摘む

中沢けい



野ぶどうを摘む

中沢けい

講談社

野ぶどうを摘む

昭和五十六年六月二日 第一刷発行

著者——中沢けい

© Kei Nakazawa 1981, Printed in Japan



発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四五—二二 振替東京—五五〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——八八〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えます。

野ぶどうを摘む

装画 田中 孝

(シルクスクリーン

Tree)

装幀 大泉 拓

目次

余白の部分

5

海上の家

55

野ぶどうを摘む

125

余白の部分

青い早生ミカンが積まれていた。その色は果物よりは植物に近い感じだった。果物屋の燈りというのは、何処でもそうなのかもしれないが、オレンジ色に見える。洋品店などの白々しい燈りではなく、夜店のアセチレンガスの燈りに近い。駅前の店の燈りは特に暖かく思われた。リンゴ、ナシ、バナナ、ブドウと積まれた果物の中で早生ミカンの色が一際、鮮やかだった。

私はコートのポケットにある小錢を数えてそのひと山を買おうかどうか思案した。洋が部屋に来ているかもしれない。五つずつ積まれたひと山は二人で食べるには少ないくらいだ。指先でミカンをさすと、店員が待っていたように素早く茶色い袋に包んでくれた。冷たく丸いミカンの膚が、かさかさした紙の向こうにあった。

青い、出初めのミカンを買ってもらえたのは運動会の時だけだった。懐かしい薄茶色の霏が胸に拡がる。遠くアスファルトの上で街燈が光っている。そういえば、フォークダン

スの相手を引き倒して、鼻血を流させたことがある。体格のいい男の子の鼻から流れた血が、校庭の青い石の上について、黒ずんで見えた。あれも運動会だった。

冷たくなりだした風の中で記憶にもぐりこんで暖まろうとした私は厭なことを思い出したと思った。いつの間にかアスファルトの路面を見つめていた。

私は、フォークダンスでさえ手を繋いでもらえなかった。男の子には奇妙なほどの嫌われ方をしていた。わざとらしく、私の肩の上に置くはずの片手を五センチほど離していた男の子にむかって、飛びつくように手を握ろうとしたのは小学校の何年生の時だったのか。次の瞬間、彼は重心を失って校庭の白っぽい土に俯せに倒れていた。青い石の上に血がぞっとするほど黒く、べったりとついていた。たくさんの子供たちの視線が私に向けられる。視線に搦め捕られて身動きできなくなった私が見たのは、風に吹かれて波のような模様を描いている稲田だった。

つま先で蹴る石も無いアスファルトの道が続いている。ミカンが掌の中で暖まりだしていた。学校では本ばかり読んでいた。まるで同輩の目から逃げようとするように。私の身体が居るのは教室でも、意識はどこか遠くへ行こうとしていた。

茶色い袋を持ちかえる。ひんやりとした感触がまた掌に伝わる。どこかで金木犀の匂いがした。顔を上げると、青みがかった石垣の上に細かなオレンジ色の花がこぼれている。

そのあたりの路面にもこぼれていた。暗く沈んだ大きな家の正木の生垣から、金木犀の枝が覗いている。オレンジ色の房になった花が、重くさがっていた。

扉をあけると部屋の中はすっかり金木犀の匂いで埋っていた。週末のなんとなく疲れた身体がすっぽりと古く夢の中へ飛び込んだ気がした。それほど机の上の牛乳瓶にさされた金木犀の匂いは部屋を覆っていた。

燈りを点けようと、つま先立つ。が、私は燈りをつけないまま、ベッドの縁に腰かけた。窓から青白い光が射し込んでいる。時々、赤く明るくなるのは何処かで点滅するネオンサインのためだろうか。

目をつぶった。瞼を閉じると暗闇の中で明るく照らし出された一本の太い金木犀の樹が見えた。昨夜、見た金木犀ではない。照らされていると言うより、その樹自体が内側から光っているという感じだ。枝いっぱいに溢れるほど付けた花を風にホロホロと散らせている。それは高校生の時、一度だけ見たことのある金木犀の樹だった。

私はベッドに仰むけに勢いよく倒れた。背中にバジャマのボタンが当って痛い。暗い部屋の窓ガラスだけが鈍く青く明るかった。

再び瞼を閉じる。学校全体が文化祭の前日で熱を含んでいた。暮れかかってしまっ

らも、あちらこちらの教室から、釘を打つ音や催しものの練習をする声が聞こえた。

理科室の上の教室では、演劇部が練習をしている。「若年」という芝居だった。アルコート漬のヤモリの目がガラス瓶の中で冷たく光る標本棚の陰だった。洋がまだ擦り切れた学生服を着ていた。金ボタンが僅かな光にひかかった。唇を合わせた時、身体の中にもヤモリがいると気づいた。澄んだ冷たい目は水晶よりも固く思われた。生臭くねばり付く皮膚の色と疣。腹の下の湿った褌に身を潜めていたものが、その時急に身をくねらせた。自分の内にある大きな褌に巻きこまれてゆく。赤く薄桃色がかった肉の内へずんずん入り込んでゆく。

洋が帰ったあとに残されて、私は校舎の脇の暗い道で金木犀を見た。正確には匂いをかいたのだが、垣根ごしに私にははっきりとその金木犀が見えていた。形のよい枝から花が風に散らされてゆくのを、私は黙って見ていた。

一年先に洋は卒業していった。私はぼつんと残された気がしていた。東京に就職した彼からは手紙一本来ない。来るはずもない。洋は私の身体を知ってしまったから極端に私をさけていたのだから。

金木犀の大きな影がゆれる。風に吹かれて葉の一枚一枚がひるがえってゆく。洋がいなくなった奇妙に空虚な時間、私はあの帰り道で見た金木犀を想い描いた。そして、自分の

身体を探ることを覚えた。洋と一晩いっしょに居てみたかった。

指先で探る身体の中に無数のヤモリたちが居た。その皮膚を私の内側にこすりつけ、頭でのどもとを突き上げ、赤い舌を出していた。

どのくらい時間がたったのか解らない。顔をベッドカバーに押しあてたまま眠っていた。夢を見ていた。視線の渦が、光り、周囲を圧していた。意外なものに出会ったと思っていたうちに私は足をとられた。風の音のように聞こえていたのは、忍び笑いと囁き声だった。密度の高い視線の中で私は小さく押し潰されていく。

いやなこだね。めつきがわるいよ。きどっているんじゃない。わざとなんでもしっているふりして。めだつことばかりするんだからと言う囁き声。

屈辱感で顔を赤くしている私が立っている。「こんな思いをするのは自分が悪いからだ」と締め上げられる。ぐるぐると渦巻く視線の底に私をしっかりと捉えている大きな目がある。

扉がノックされた音で目覚めた。口の中がねっとりとして厭な臭いがした。「だれ」と聞くと僕だ僕だと二度続けて答えた。

もう寝てしまっていたのかと聞きながら洋は部屋に上がって靴下をぬいだ。蛇口から勢いよく出た水が、やかんに入ってゆく。青いミカンを皿に盛りながら、うたた寝をしてい

たと答えた。まだ腹の底に視線がたまっている。重苦しい。洋は暢氣そうに煙草を吸っていた。

夜中に目を覚ました。外ではめずらしく風が吹いていた。雨戸がなる。ざわざわしているのは隣家の柿の木だろうか。間近に洋の顔がある。五センチほどの距離もない。ニキビのあとが残っている。氣にして潰す癖のためか黒く跡になったものや赤く痂になりかかっているものもある。

夜中に目覚めた時の不安感が少しも無い。腕をのばすと生暖かい洋の身体がある。しっかりと固い肉付きをしている。裸の腹に自分の腹を押し付けると穏やかな寝息と少し熱いくらいの体温が伝わってくる。風が吹いている。子供の頃、風を受けて電線が鳴るのを聞きながら、いつも怖しいと思い、隣にだれか居てくれればいいのにと布団の中で縮こまっていた。

よく寝ている洋の両足の間に自分の足をさし入れてみる。まだ小さい頃、父が私の足をはさみこんで暖めてくれた。父とちがって洋は脂性なのか胸や背中にまで大粒のニキビのような吹き出物があった。窓ガラスに隣家の樹々が揺れる影が映っている。だれかが大きな声で歌をうたいながら通り過ぎていった。

いったい、なぜ自分がそれほどまで、洋に執着したのか、今になるとよく解らない気がした。居なければ居なくともいい気がする。ただ、隣に居てくれる人間が、誰も居ないと思うと正体の知れない不安に包まれる。軽くいびきをかいて無防備に口さえあけて寝ている洋の顔を、指先でなでると、自分の気持ちが悪しくなってきた。指先がニキビの跡にふれると口をもごもごさせながら、手を払い除けた。

外の光で部屋の中は薄青い。風は台所のガラスを鳴らせたり、部屋の窓ガラスを鳴らせたりしている。机の上にひらいたまま置かれた本もノートも、食べ残されたミカンの皮も部屋のそこに沈んでいるように見える。自分の瞳だけが生きて光っている。私は横たわったまま、じっと部屋の中を見ていた。

頭が重い。朝はいつもそうだった。特に日曜の朝は気持ちが悪くくとしていたためか目覚めても、なかなか起き上がる気にならない。ベッドの中で眠気のとれない顔をシーツに擦り付けている私に洗顔をすませた洋はしきりに出かけようときそう。洋に引きずられるようにして外に出た。

洋と何度か来たことのある公園に行き、しばらく散歩した。それまでは気付かなかったが園内に動物園があった。入口に子供を抱いたパンダの募金箱が置いてあった。「熊が見たいよう」と私はパンダの頭をさすりながら言った。熊が特別見たかったわけではない。

子供っぽく、はしゃぎたかった。クマガミタインダ、クマガミタイヨ。そう言って動物園なんて臭いだけでつまらないと言う洋のまわりを回った。すいすいと自分の中にあつた重苦しさが溶けていく。わざとらしいほど子供っぽく振る舞っている。生臭い印象さえあたえかねない関係が無邪気な秘密に見せてくれるように思える。

子供だと思われたくない、出来る限りしっかりと振る舞わなければいけない、妙な甘えで親に迷惑をかけてはいけない。そんな風に張りつめていた気持ちが洋の前でぽんとはじけて消える。よく晴れた青い空へ、私の中のひねくれた部分が放り出されて、のびのびした気持ちにつつまれる。

閉園まぎわだった。キップを買う時、あと三十分しかありませんよと窓口で言われた。帰って行く親子づれを見ながら、洋はまた少しためらった。赤い帽子をかぶった女の子が父親らしい男の肩にのって何かを話している。男は時々、笑いながらうなずく。私はしばらく、その二人を見ていた。それから、ためらっている洋にクマガミタインダと再度言つてキップを買わせた。

園内に入るとすぐクマの檻を探したが見つからなかった。ゾウが鼻でワラをすくつて食べていた。もう餌をあたえる時間なのだろうか。

「クマヲ、サガソウヨ」